

# 樺 太

## 樺太引揚者としての体験記

北海道 佐藤道三

郷里の土佐で四年ほど小学校教員をして樺太に渡ったのは昭和二年であった。当時十人兄弟の長男であった私は俸給の大半を家庭に入れていたが、樺太の教員は俸給の六割加算があるというので樺太移住の知人の世話で樺太豊北村深雪小学校の教員として採用されたのは二十二歳のときである。昭和六年二十六歳のとき縁あって結婚して家庭を持った。この学校で八年間勤務し、真縫校から野田町南豊校と勤務して昭和十六年三月真岡管内清水村の富沢小学校校長を拝命したのが三十六歳のときであ

る。この年四月学制改革により国民学校となったが、十二月には太平洋戦争がぼつ発し、国民総動員の戦時生活をよぎなくされることとなった。

昭和十八年に私は北海道内の教育視察を命ぜられ、翌十九年には私の学校は樺太庁より単複式教育研究校に指定され、この年十月十八、十九の二日間の樺太庁指定単複式国民学校教育研究会を私の学校で行った。樺太に渡って十八年、校長としての地位も確立し四男一女の五人の子供にも恵まれたが、渡樺以来毎月二十円（十二月には三十円）を当時大阪に居た両親に送金することは欠かしたことはない。家財道具も整備され何不自由のない生活基盤も確立された。こうした希望に満ちた生活を一瞬にしてくつがえしたのは一九四五年八月二十日のソ連軍の真岡上陸であった。この年八月十五日の終戦の玉音

放送をラジオで聞き、私たちもやがて本州へ引揚げることができると思っていた矢先の八月二十日朝、突如として真岡方面から艦砲射撃の砲声と機銃掃射の銃声が入りまじって聞えて来た。ソ連の軍用機が低空で学校の上を飛び盛んに機銃掃射を行った。私たちは山の奥に避難していたが、憲兵が来て今こは戦場になるので豊原の方へ避難せよと伝言して行った。中学一年の長男は前日寄宿舍に置いてある物を取りに行つてくると真岡へ行つたまま帰つてこない。私たちが避難したあとに帰つて来たら困るだろうと玄関に行先きを書いて張り紙をして、夕刻部落の人たちと共に豊真山道を豊原に向つた。

逢坂では道路の両側の家はソ連機の爆撃のため火災を起こして燃え盛り、電柱は倒れて電線に足をとられる。逢坂国民学校に駐屯していた日本軍部隊は、真岡から熊笹峠方面を攻めてきたソ連軍と壮絶な戦闘を展開し、あつただしく動きまわっていた。こうして燃え盛る逢坂の市街を命がけで通り抜け、豊真山道を数十キロ歩いて漸く豊原近くの軍川の流送飯場にたどり着いた。

一か月ほどここで暮らしているうち、ソ連軍より日本

人は職場に帰えれという命令が出た。部落民たちは軍川の学校に集結して明朝早く富沢へ帰ろうというその夜、富沢の校長先生は居ませんかと訪ねて来た見知らぬ老人から、長男の晃一が無事で真岡に居ることを聞かされ、ひと安心して翌日富沢に帰つた。学校にはいると目ぼしい物はすっかり持ち去られ、夜具も皮はすっかりはぎ取られてぬき綿ばかり。二枚続きのラクダの毛布も全部持ち去られて影も見えない。幸いにくばくかの米は残っていたのでどうにか生活はできた。

野田のソ連教育局からの命令で日本人児童の教育は再開されることになったが、戦時中の教科書は使うことができず、臨時のカリキュラムを編成して四十人ばかりの児童の教育にあつた。校長住宅にはソ連兵が十人ばかり寝泊まりして毎日どこかへ仕事に出かけていたが何をしていたのかわからない。仕事が終れば学校へ遊びに来ていろいろの話をしていた。毎月の俸給は野田の教育局まで受取りに行くのだが数十キロの道程を夏は徒歩で、冬はスキーで行つた。俸給はルーブル紙幣で支給されその何割かはソ連の債券で支給された。

希望も何もないこんな抑留生活がいつまで続くのか。教育局長のアフチンニコア女史はときどき私の学校を訪ねて来た。佐藤さんの学校はいい学校ですねとほめてくれる。本州の方に年老いた両親がいるので早く引揚げさせてくれと頼むと、あなたか引揚げたらあとに残った日本人の子供たちの教育は誰かしてくれますか。この部落の日本人がみんな引揚げようになつたら一番先にあなたがたを帰してあげますという。こんな生活が三年も続いた昭和二十三年六月ようやく引揚命令が出て真岡港から引揚船徳寿丸に乗船し、一路北海道函館港に向つた。長い三年間の抑留生活であつた。

函館の引揚者援護局の世話で空知管内の炭鉱地の学校に勤務することになったが、住宅が無いので炭鉱の八軒長屋の一戸を借りて引揚者としての何もない生活の第一歩が始まった。何年かたつて漸く人並みの生活ができるようになったが、樺太での終戦から三年間の抑留生活はわが家の生活を狂わせてしまった。

## 戦後、四十五年に想う

北海道 長 浜 みさ子

今は昔、昭和二十年八月、私は小学校二年生のとき、生れ育つた樺太で「生か死か」の体験をもつた者です。

まだ、幼く深い意味など分らなかったが空襲で疎開したときの苦しかった日々が、四十数年たった今もありありと思ひ出されます。

当時、私は両親から離れ兄のもとに行つていたので、その兄に召集令状が届き戦場に向かつたのが、十九年の夏でした。

残された私たち（義姉と二歳の娘）は留守を守っておりましたが、二十年にはいってだんだんと戦争が激しくなり、八月十三日頃だつたと思います。防空壕に避難していた私たちに疎開命令が出たのです。

一旦家に帰り身支度をして、再び班長さんのもとに集合しました。